

特集解題

小林 元

Kobayashi Hajime

広島大学大学院統合生命科学研究科 助教

新型コロナウイルス(COVID2019)の世界
的な蔓延で2020年は幕を開けた。本稿を
執筆している時点(2020年3月1日)で、そ
の見通しは、明るいとまでは言えない。
ひとびとの心理的な環境も、必ずしも明る
いとは言えない。むしろ、混乱に乗じて、社
会を分断しかねない言説が独り歩きしてい
ることに危惧を感じるし、文書主義を一つ
の基底とするはずのわが国の民主主義も大
きく動揺している。

手塚治虫氏の鉄腕アトムが、はじめて世
に出たのは1952年である。ちなみに、アト
ムの誕生日は2003年4月7日とされる(ア
トムの妹ウランも同じ誕生日である)。すな
わち、鉄腕アトムの世界は、いま私たちが生
きる時代に他ならない。

鉄腕アトムに限らず、SFやアニメの世界
では、2020年はより科学技術が進んだ世界
として、夢が描かれてきたはずだった。もち
ろんディストピアを描く作品も多く見られ
たが、それにしても、私たちが暮らす現在 =
2020年は、過去のひとびとが描いた夢とは、
いささか異なるようだ。

そうした中で、本特集は、10年後の未来
である「2030年の協同組合」に焦点をあて
ている。未来を予測すること自体が、社会科
学領域を中心とする研究誌として妥当か否
か、という点は議論の余地がある。なぜな
ら、未来予測は、例えシミュレーションに基
づいたものであっても、それは私たちの選
択肢の一つに過ぎないからである。未来予
測は、書き手の願望も含めてフィクション
であるし、時にはサスペンスですらある。

そして何よりも、研究者として未来のこ
とを書くことは、少し気恥ずかしいところ
があるものだ。ギリシア神話の王女カッサ
ンドラをはじめとして、古来より預言者は
不幸な未来が見えると同時に、不幸な生涯
を送ることが約束されている。

にもかかわらず、10年後の未来を考える
という挑戦的な特集を企画したことには、
それなりの含意がある。一つには、10年後を
予測する上で、現時点の社会と協同組合の
立ち位置を、あらためて歴史的に俯瞰する
といった作業が必要となるという点だ。

例えば、今日の少子高齢化と人口減少は、

大きな社会的課題と言われる。地域間格差が課題となり、労働力不足が問われ、高齢者をはじめとした社会保障のあり方が議論の俎上に上がる。それぞれ、各論的にはさまざまな議論があるが、総論としての社会像は、せいぜいIndustry4.0やAI社会程度の技術論の範疇に留まる。厳しい言い方をすれば、Industry4.0やAI社会などは、技術の奇形的発達の延長線上にあり、社会像そのものの議論とは言えない。近年のSNS(ソーシャルネットワーク)の世界を見る限り、「バカ発見器」を活用した相互監視社会化、その先にはSFに描かれるディストピアが関の山だ。いずれ、絵に描いたようなステレオタイプの独裁者や企業体を産み出すかもしれない。同時に、これらの技術論は、成長・拡大を続けることが前提とされた資本主義の枠を超えるものではない。

対して、見田宗介氏や広井良典氏は、「定常型社会」を提唱する。「定常型社会」とは、簡単に言えばゼロ成長社会であり、そして、成長・拡大とは異なる社会の指標を探ろうという考え方である。例えば、幸福の度合いであったり、地域であったり、豊かさであったりといった異なる指標である。暉峻淑子氏の「豊かさとは何か」(岩波書店、1989)に近い視点だ。

一見すると、こうした「定常型社会」の議論は、協同組合に親和性があるように見える。しかし、既存の協同組合の多くは、その

厳しい市場環境の中で、事業と運動は分離し、その経営は厳しさを増している。理念的には「定常型社会」を目指しながら、日々の経営では成長と拡大、競争にさらされる。

こうした協同組合が抱える矛盾、それ自体、永年の議論を経ているが、答えは出ない。むしろ目の前の厳しい環境から目を逸らしつつ理念を語る、もしくは理念を棚上げて現実に向き合う、というところであるならば、いっそのこと、未来から考えてみるのは、どうかというところが本特集の含意の一つである。格好よい言葉で言えば、バックキャスト(バックキャストイング)と言ってもよい。

二つ目の特集の含意は、夢を語る点にある。現在の社会を見回すに、多くの課題が生じていることは、自明である。鉄腕アトムが描いた高度に技術が発展した社会においても、ひとびとは生きづらさを抱え、そして社会は多くの課題を抱えている。だからこそ、アトムは希望をもたらすのであり、鉄腕アトムの世界のひとびとはアトムに期待を寄せたのである。協同組合が現在の鉄腕アトムとなりうるか、とストレートに言えば、それは甚だ巨匠手塚治虫氏が描いた夢に対して失礼かもしれない。

しかし、「時代の子」としての協同組合は、ひとびとのその時代の課題を、ひとびと自らが結集して解決する運動体であり、事業体であるはずだ。だとするならば、協同組合

が、その時代の鉄腕アトムたりうることは、なんらおかしい話ではない。であるならば、10年後の社会を見据えて協同組合の像を描くことは、協同組合だけではなく、社会の夢にもつながるはずである。

たぶん、現在の協同組合において、夢を語る道具の一つが、SDGsであろう。しかし、困ったことに、筆者はSDGsが大嫌いである。SDGsの17の目標は、それぞれ、長い議論がある。ところが、「SDGs」というアルファベット4文字にした瞬間に、それらの議論の積み重ねを遠方に追いやり、「SDGs」という言葉だけが独り歩きした。

スーツの左胸にSDGsのバッジをつけただけで、中身を知ろうともしない人間には、持続可能な開発目標は達成できない(そもそも知ろうともしない)。SDGsを掲げる会合で、参加者ひとりひとりにペットボトルのお茶が配られている絵姿(しかも会場には男性しかいない)は、もはや滑稽ですらある。もちろん、この会合に出席した参加者は、場所を移して懇親会を楽しむ。懇親会が終わった会場には、少なからずの食べ物や飲み物、そして棚上げになった重要な議題が、手付かずのまま残されているのである。

かつて、日本協同組合学会の大会シンポジウムで学会員以外の識者が、ソーシャルキャピタルの議論について、「言葉のブラックホール化」と鋭く指摘したことがあった。まさにSDGsという言葉自体が免罪符とな

り、ブラックホールと化している現状は喜劇としか言いようがない。

というわけで、「SDGs」という言葉に頼るのではなく、協同組合としての未来の夢を、自ら語ることを本特集のもう一つの含意とした。本音は、2030年に向けて、国際協同組合同盟(ICA)の「協同組合の10年に向けた計画(ブループリント)」の日本版があってもよいのではないかと、いうところだ。ただし、一回の特集でどうなるものでもない。本特集が、未来に向けた議論の第一歩となれば、というあたりが、筆者の個人的な妄想である。

本特集では、本誌にじの編集委員会(巻末参照)を中心に、執筆を依頼した。それぞれの論稿は、必ずしも、本解題にあるような含意にとらわれるものではない。執筆者には、2030年の協同組合と題して、各自の専門領域に応じて、自由に執筆していただいた。こうした自由な議論が、協同組合の未来を拓くことを、切に望みたい。

小林 元 (こばやし・はじめ)

広島大学大学院統合生命科学研究科助教。
1972年静岡県生まれ。広島大学大学院修了、博士(農学)。一般社団法人JC総研などを経て、2015年より現職。専門は集落営農や協同組合論など。主な著書は『JAは誰のものか 多様化する時代のJAガバナンス』(共著)『次のステージに向かうJA自己改革 短期的・長期的戦略で危機を乗り越える』(ともに家の光協会)など。